

山谷のホスピス

大都会東京で日雇い労働者たちが生活する街・山谷。簡易宿泊所が建ち並ぶ街の中に、マンションのように見える「きぼうのいえ」(台東区清川2)がある。

「きぼうのいえ」を訪ねて

【吉永磨美】

そこでボランティアをしている知人と昨秋に出会った。「いつか取材したい」と、ずっと気になっていた。どんなケアをしているのか、訪ねてみた。



ホスピス「きぼうのいえ」でのボランティア体験。入所するお年寄りやダンスをする吉永磨美記者(左から2人目) 台東区清川で1月31日、松田新徳撮影

JR南千住駅から歩いて10分ほどの「きぼうのいえ」に着いた。4階建ての茶色いビル。午前9時、入所者の世話をするスタッフのミーティングが始まった。「昨日は熱がありました」「今朝は下がりました」「食事をとっていないようです。注意してみていきま

なぜか「安堵」感じ

しょう

山本雅基施設長(44)と妻で看護師の美恵さん(49)らが連絡を密に取り合う。入所者の様子が個別に報告された。

末期のがん患者や寝たきり生活になった人たちが、行き場を失い、「終のすみか」として入所している。さまざまな理由から家族と

分かれて生活していたり、山谷で長く日雇いで働いてきた人が多い。21の個室は満室だという。医療行為は、周辺から医師や看護師が出張して施す。痛みの緩和など終末期医療も担当。

ます、施設内を見てもらうことになった。25人のボランティアが、入所者の身の回りの世話をするため活動する。その控室には、患者の部屋からの呼び出しボタンがついていた。非常勤の女性スタッフに同行し、4階の男性の部屋の扉を開ける。ベッドの回りは、冷蔵庫などの生活用品が所狭しと並べられていた。ベッドにトレーナー姿



ホスピス「きぼうのいえ」(中央)

木曜日の午後は「ティーサービス」と呼ばれる恒例行事。週一回、ボランティアが来て、車椅子の男性や

気づくと私も笑っていた。ダンスをすることになった。八代亜紀さんの曲を流し、リズムに合わせて踊る。私は、身寄りのない高齢の女性の手を取った。がんに侵されているという。足が悪い相手に気を使いながらステップを踏む。楽しそうな表情が見えた。ほどなく、ほかの入所者も踊り始め、輪が広がった。ほのぼのとした空気が流れた。

の男性が一人横たわっていた。「どうされましたか」とスタッフ。初老の男性は背中が痛い。よく眠れなかったと済まそうに話した。「いつでもボタンを押して来ていいんですよ」。

スタッフは背中を丁寧に指圧した。「ああ気持ちいいなあ。ありがと。ありがと」。男性はまるで母親に甘える子供のようだった。

アがコーヒーや紅茶を振る舞いながら話をする。「吉永さん、みなさんと話して。ペテランの女性ボランティアから言われた。何を話せばいいのかわかなくて戸惑り。談話室は笑いに包まれ、

介助なしで歩けない女性、手術が終わったばかりという男性……。冗談を言いながら、食べ物から恋愛までざっくばらんなおしゃべりを話せばいいのかわかなくて戸惑り。談話室は笑いに包まれ、

よりむしろ「安堵」の空気が漂っていた。なにより、私自身が素直になれた気がする。冬空の中、不思議な高揚感に包まれ、山谷を後にした。

行き場を失った人のために

メモ

「きぼうのいえ」(特)が任意団体「山谷・すみえ」は、主に身寄りない患者を受け入れる民間のホスピス。01年に、ホームレスを含め約40人が活動していることを目的に山本雅基さん

寄付で運営。

医師やヘルパーが個室を訪ねる。在宅介護のスタイルをとる。ボランティアは掃除や買い物、食堂の配膳(はいせん)などの世話をす。屋上にはキリスト教の礼拝堂があり、施設で看取った人々の葬儀もする。

東京見聞録